

幸せのうた

毎日が幸せになる詩

阿閉真琴

水芭蕉

水面に浮かぶ水芭蕉
その花卉から赤ちゃんが
生まれるように見えたのは
まぼろしでしょうか 夢でしょうか

水面に浮かぶ水芭蕉
この花のような潔白を
心に欲しいと思いつつ
山には空がうつくしい

水面に浮かぶ水芭蕉
母のようにそっと咲く
ぬくもりに心は熱く
この世はわるくないと思う
あの日に思っていたよりも
この世はわるくないと思う

幸せのうた

自転車で風に乗る少女

自転車で風に乗る少女

あえいうえおあお と笑顔の練習

自転車で風に乗る少女

あえいうえおあお と健康な口

自転車で風に乗る少女

黒髪にハツラツと前へゆく

追いかける白い雲 少女は

立ち漕ぎで

あ え い う え お あ お

自転車で風に乗る少女

青春短し恋せよ乙女

ひまわり

ひまわりは太陽の風車
風になびいて やさしく歌う

ひまわりはミツバチのおうち
背筋をのばして 待っている

ひまわりはお花のなかのライオン
あの子を守るぞ 凛としている

あなたのなかにもあるひまわり
まっすぐ あかるく咲いている

あかるい あかるいひまわりが
あなたのところに 咲いている

希望と元気をメジルシに

幸せのうた

太陽目指して 咲いている

ひまわりみたいなあなたには
青いお空が よく似合う

少年と太陽

ある明るい星で、少年は太陽をつくっていました
特殊な粘土を丸めて
丸く丸く大きな玉をつくり
出来上がった大きな玉に
少年は火を灯しました

すると玉は、瞬く間に
さらに信じられないほどに大きくなり
空へと飛んでいきました

大きな玉は
何億光年も離れた場所へ
光のスピードで飛んでいき
「わたしはここにいることにしよう」とつぶやいたあと
私たちの地球を照らし始めました

その日を境に地球には朝と昼とが生まれ
悪事は光の下で裁かれ

幸せのうた

恋が輝き

笑顔が溢れ

作物が育ち

人々は春のきらめきに

心躍るようになりました

少年は何億光年ものあいだ

何も言わず

ただ太陽をつくり続けました

孤独と戦うために

少年はいつまでも少年のまま

生涯何個もの

太陽をつくり続けました

愛とは

愛とは きっと 疑わないこと

疑わないとは きっと 恐れないこと

裏切られることを 恐れないこと

あなたは それを知っている

信じるという気持ちの 一歩上

愛はきっと 疑わないこと

すべて受け止めるということ

何が起きても大丈夫という気持ち

広い海のように

幸せのうた

聳え立つ山のように

あなたは愛を
知っている

愛もあなたを
知っている

それぞれのよう

お月様になったような気持ちで
世の中を見てみた
大切な人を守りたいと思った

太陽になったような気持ちで
世の中を見てみた
大切な人を励ましたいと思った

海になったような気持ちで
世の中を見てみた
大切な人を癒したいと思った

山になったような気持ちで
世の中を見てみた
「大丈夫だよ」と伝えたくなった

幸せのうた

人として
世の中を見てみた

そんな大それたことは
できないけれど
それぞれのよう
人間でありたいと
私は思った

LOVE IS

あなたは守られています

あなたは生かされています

あなたは許されています

あなたは信じられています

それでも迷うなら

あなたは試されています

あなたは望まれています

あなたは想われています

あなたは期待されています

幸せのうた

あなたは支えられています

あなたは称えられています

あなたはつながっています

あなたは愛されています

それはあなたが 今まで

無償の愛を捧げ続けてきた

答えです

ピンクレディー

ピンクレディーがおりました
夏の祭りの籤引き場
大きなポスター 一等賞で
ヨーヨー風船手で叩き

ピンクレディーを歌っていた
お化け屋敷のひゆる声に
あの子は泣いて 声とめた
踊るのをやめて 泣いちゃった

心に浪漫がありました
誰もが太陽抱えていた
どっぽん便所に口笛で
歌って笑った時代です
ピンクレディーがおりました
優しい時代でありました

幸せのうた

ばあちゃんにっこり笑っていた
ゆたかな時代でありました

何もなかった あの時代
色んなものがありました
何もなかった あの時代
色めく歌がありました

ピンクレディーがおりました
教室の隅で踊っている
あの子のことが好きでした
とってもゆたかな

ゆたかな時代でありました

魔法の言葉

魔法の言葉を唱えよう

なるようになる

ケ・セラ・セラ

大丈夫

不安になったら唱えよう

なるようになる

ケ・セラ・セラ

大丈夫

どうしようもないと思ったなら唱えよう

なるようになる

ケ・セラ・セラ

大丈夫

幸せのうた

うまくいっているときこそ唱えよう

なるようになる

ケ・セラ・セラ

大丈夫

言葉はカタチになる

無敵の言葉

心の海

孤独に色があるのなら あなたの孤独は何色でしょうか？
紫ですか藍ですか 高貴な色の孤独でしょうか？

孤独に色があるのなら あなたの孤独は何色でしょうか？
緑ですか青ですか 地球の色の孤独でしょうか？

孤独に色があるのなら あなたの孤独は何色でしょうか？
黄色ですか橙ですか 眩しいような孤独でしょうか？

孤独に色があるのなら あなたの孤独は何色でしょうか？
真赤な真赤な赤ですか？ 太陽のような孤独でしょうか？

孤独を知らない人はいない みんな孤独をにぎりしめ
それぞれの想いを生きている だから笑顔が輝いて
孤独が人を温めて 孤独が笑顔をつくっている
あなたの孤独は何色でしょうか？ 優しい色だと思うのです
が

幸せのうた

孤独はあなたの優しさが つくったものだと思うのですが
私の思いはあたっていますか？

聞こえていますか？

この指の先に
宇宙があつて
人が住んでいるとして
(たとえば人差し指に その先に)

ミエルデシヨ？

その人の指の先にもまた
宇宙があり人が住んでいるとして

エンドレス

ぼくのいる宇宙もまた
誰かさんの指の先にあり

その誰かさんの住む地面もまた
誰かさんの指の先にある 宇宙

幸せのうた

ぼくはその源に呼びかける
それは途方もない歴史

星を見上げると
あの星にも人が住んでいて
どこかの星を見ているとして

ぼくはぼくが住む宇宙の
源へ問いかける
「あなたの名前を教えてください」

あかときいろ

行け！太陽色クオリティー
この想いを 気愛で空に飛ばそう

温かなセカイに
いま心よ羽ばたけ

夢色に ライド・オン
ぼくは未来を信じる

虹よ架かれ もっと
高く ブルーの空へ

きみがきいろならぼくはあかいろ
その理由がわからない？
ぼくらが交ざれば
やがてオレンジ色になる

幸せのうた

雨も樹も人も照らしてゆく
太陽になれる

想い寄り添うヒストリー
空に未来の絵を描こう

きみがきいろくてぼくがあかいろ
鮮やかだ

空から降りる天使の帯

きみがきいろくてぼくはあかいろ
この世界はステキさ

人

人はどうして悩むのだろう
取り囲む壁を透明にできればいいのに

人はどうして迷うのだろう
目の前の道を一本に出来ればいいのに

人はどうして哀しむのだろう
二度と離れない紐があればいいのに

人はどうして繰り返すのだろう
やがて来る未来がわかればいいのに

人はどうして答えを探すのだろう
心が広がる青空ならいいのに
人はどうして納得しないのだろう
感謝で世界が満ちればいいのに

幸せのうた

人はどうして愛しいのだろう
神へと近づきたいと願う
その愚かさが愛しいのだろう

人はどうして人なのか
何千年もの彼方から
誰かの声が聞こえてくる

泣かなくていいから

星座があんなにも遠いのは
僕らがいつまでも夢を
追いかけてられますように
という
神様の優しさ
時々、星座をつかむ人がいて
そのまま輝き続ける人もいれば
流れ星。になる人もいる。
そして人はその流れ星に
3回の
願いごとを願って
また星を眺める
地球がいつまでも回り続けるのは
僕らが過去を追って
泣かないように
という

幸せのうた

神様の優しさ

地球が一周すると

また過去に出逢うけれど

思い出したその過去は

素敵な宝箱にしまってあげる

雨が空から降るのは

私はいつもここにいますよ

という

神様の優しさ

雨があるから人は

孤独ではないね

光だけでは案外寂しくなってしまうこともあるよね

この世に人間だけでなく

色々な生物がいるのは

仲良くしなさい

という

神様の優しさ

鶏肉を食べて、牛のお乳を奪って

鯨までも飲み込んで

大事なことに、ハッと気づく
この世を見渡せば
僕らは気づく
満ちてる満ちてる満ちてる世界

幸せのうた

一個売りの林檎

一個売りの林檎になろう

一山いくらにはならない

綺麗に磨かれて丁寧にラッピングされる

蜜もしたたる 美味しい林檎

一個売りの林檎

たとえ美しい農園に育たなくても

管理されていない嵐の中でも

どんな場所でも実ってみよう

真っ赤に 真っ赤に 精一杯育ってみよう

一個売りの林檎

一山いくらにはならない

たとえダンボールにごろっと並んだとしても

ひときわ目をひく林檎

丁寧に切って食べてもらえる
口の中に感触がずっと残る

みごとな林檎

桐箱にラッピングして
誰かにプレゼントしたくなるような
一個売りの美味しい林檎になりたい

幸せのうた

アボカドマヨネーズ和えください

古本屋のおじさん
ぽっかりあくび
した先にほら小さな宇宙
小さな宇宙のなかに
あらやさしい雨
雨の中にまあ謎
謎の中にそう男と女
男と女がまたあくび
あくびした先にほらまた小さな宇宙
小さな宇宙の中で
さあ乾杯の音が鳴り
まあとりあえずほら
唐揚げと
アボカドマヨネーズ和えください
それと生
これからのことは

まあおいおい話し合うとして
今はほら楽しい会話を
男と女に
あくびは禁物です
次こそは戻れない
哀しい宇宙が生まれてしまいますよ
美味しい
ああアボカドマヨネーズ和え美味しい
ね
美味しい
あれ
アボカドマヨネーズ和えのなかにもまた宇宙が
その宇宙のなかにも男と女が
とっても幸せそうですよ
ああ男と女があくび
でも二人はとっても幸せそうです
日溜りに
未来が浮かんでいます

幸せのうた

まんまる

まんまるはすばらしい
だってはじっこがないから
あらそうこともないままで
ずっところころころがれる

さんかくはさんにんのおうさまが
それぞれにらみをきかせてる
いちばんうえはだれがなる
そんなまいにちくりかえす？

しかくはびょうどうっぽいけれど
やっぱりふえあじゃないかんじ
したでふたりがささえてる
うえでふたりがすましがお
まんまるやっぱりすばらしい
だってはじっこないままで

幸せのうた

あらそうこともないままで
ずっところころころがれる

まあるいひとになりたいな
まあるいえがおでまあるいころ
まあるいいちにちすごしましょ
まあるくげんきにわらいましょ

まんまるやっぱりすばらしい
おててをつないでまんまるに
たのしいことやうれしいことを
まあるくまあるくだきしめましよう

心の音を聴くやうに

心の音を聴くやうに
この胸の邪を確かめつ

心の音を聴くやうに
この胸の真を確かめつ

心の音を聴くやうに
本当の本当を確かめつ

心の音を聴くやうに
神の本音に耳澄まし

心の音を聴くやうに
吾の居場所を確かめつ
心の音を聴くやうに
寂しい空を眺めつつ

幸せのうた

明日の音を確かめつ

明日の歌を確かめつ

心の音を聴くやうに

僕は今日も空を見てゐる

コインランドリィで昼寝するおばあさん

コインランドリィで昼寝するおばあさん
家に帰ると猫がにゃー しっぽぴーン
猫は時々花になり
人が来たなら蝶になる

コインランドリィで昼寝するおばあさん
時々一人で踊っている
チャールストンを軽やかに
乾燥機開けて踊っている

あの子がなかなか来ないから
おばあさんよいしょと服たたみ
おや？この子も来ないねと
きれいに服をたたみます
そして昼寝のおばあさん

幸せのうた

ひねもす椅子にもたれては
少女みたいに微笑んで
ケセラセラよと窓を見る

猫はお家で待っている
しっぽのぼして鳴いている
おひさま照らした窓見つつ
おばあさんまだかな
待っている にゃー にゃん

スポットライト

今幕が上がる

スポットライトがあなたを照らす

そのあいだ 観衆の姿は眩しくて見えない

あなたは踊る

あなたは歌う

人生のステージで

あなたの姿に

観衆は笑い涙する

心を打たれる

今幕が上がる

スポットライトがあなたを照らす

どんな役でも

幸せのうた

与えられた役で
あなたはあなたとして
舞台を煌めかせてゆく

あなたは踊る
あなたは歌う
人生のステージで

今幕が上がる
スポットライトがあなたを照らす

誰かが誰かに
それを伝えるだろう

街は生きている 東京山手線にて

街は生きている

夢と時を飲み込みながら

街は生きてゆく

うねりながら 巻き込みながら

街は生きている

波のように 満ち引きのように

街は生きてゆく

時代を映しながら

街は生きている

人々が眠りにつく間もなく

街は生きてゆく

命尽きるまで

人は生きている

この街の中でつよく

人は生きてゆく

幸せのうた

自分自身を愛するために

世界を止めるほどに踊れ

世界を止めるほどに踊れ
彼の眼差しは言う

世界を止めるほどに生きろ
切実な鼓動が叫ぶ

エンターテイナーの哀しみ
夜に開かれた池袋の残像

世界を止めるほどに踊れ
彼の魂は訴える

踊っているか？
生きているか？
彼の眼差しは言う
3分間の物語

幸せのうた

自分を恥じる
眼差しに胸の奥の時間が止まる

踊っているか？
生きているか？
一瞬一瞬を重ねてゆけ

世界を止めるほどに生きろ
その時何かが見えるだろう

彼の眼差しは言う
積み重ねてきた真実は
幸せに世界を止める

しあわせくんとしあわせさん

しあわせくんはいつも笑っています
しあわせさんもいつも笑っているのに
今日はなぜか泣いていました
しあわせくんは困ってしまい
しあわせさんをなぐさめたくて
抱きしめようとしたけれど
しあわせくんもしあわせさんも
腕や体がないので抱きしめられません
しあわせくんは言いました
「なにがあったか知らないけど
僕はずっとそばにいるよ」
すると
しあわせさんはまた泣き出してしまいました。
しあわせくんは知らなかったのです
しあわせさんは嬉しい涙しか
流せないということを

幸せのうた

しあわせさんが本当になさしいときは
涙を流すのではなく
世界中の海の水が増えて
水面がくらくらなるのです
もっとかなしいときは荒波が起こります
今日の海は透きとおるくらい
輝いた青色でした

ぼくらのちいさな応援団

元気だしてこーぜー

おー！

つまんないことはきにしないっ

おー！

夢ならでっかくいこーぜー

おー！

あんたが最高！

おー！

と・・・あなたのそばで

1センチメートルくらいの小人が

ぴよこぴよこ跳ねながら

エールを贈っています

たぶん

あなたには見えるはず？

幸せのうた

太陽を描いた詩人

詩人のお話をいたしましょう
いつも太陽のお話ばかりを
していた詩人のお話です
詩人はその日も太陽の詩を
ぼかぼかとした詩を詠っておりました
詩人が公園で朗読をすると
誰もがその詩に酔いしれました
やがて詩人は詩だけでは物足りず
どうしようかと思ったあげく
大きなキャンパスに絵を描きました
大きな大きな太陽の絵
燃えるような太陽の絵
詩人は思わず見とれたあとに
太陽の絵に頬ずりをしました
そして熱い！と思った瞬間に
詩人はその絵に吸い込まれ

詩人の姿はなくなって
太陽の絵はひときわ大きくなりました
それを見たパリの画商が これはよいと
その絵を千ユーロで買いました
太陽の絵は海を渡り
一世紀近くが過ぎました
詩人が書いた太陽の絵は
いまは台湾あたりにいるとの噂です
夜になるとその絵は得意げに
太陽のような歌を詠うのです

幸せのうた

もうすこし

風が明日を詠う夜
おてんとさんは遠くから
星に伝えてほしいよと
あの子のことを想っている

風が明日を詠う夜
星は夜空でわかったと
おてんとさんにこたえている
あのこはすやすや寝てるよと

夢を覗けばお菓子屋で
大きな家はクッキーケーキ
虹のキャンディーなめながら
お昼の涙をぬぐっている
おてんとさんは喜んで
明日のために腕まくり

にっこり晴天 あの子のために
ゆたかな青を見せたいな

朝が来たなら 虹が出る
おおきな虹がかかったら
あの子は虹のたもとから
歩いて未来へ行くでしょう

幸せのうた

月と太陽

あの子の目には
お月様がふたつある
朝の目覚めは新月で
始まる希望を宿している

あの子の目には
お月様がふたつある
恋をしたなら満月で
うさぎさんたち踊り出す

あの子の目には
お月様がふたつある
月に海はないはずなのに どうして？
月から波があふれている
少年の目には
太陽がふたつあり

あの子の海を見つめている
月の涙面が揺れている

少年はどうすることもできず
ただふたつの太陽で照らしていた
少年はどうすることもできず
瞳を開くしかできなかった

幸せのうた

青

バカばかりやって
時間は無限にある気がしていた

あの日々から
遠く

夢ばかり見ていた
あの日々の空気

前を向くしかない今を
何処かで励ましてくれる

あの日々の空気に
意識を預ける

Aメジャーの音は
青い色の音

幸せのうた

まあいつか

やるだけやって

ころんだけれど

これだけなら

まあいつか

おもうような

まいにちじゃない

きがするけど

まあいつか

あのひとが

なにかひどいことを

してきたって

まあいつか

そらがあおいから

かぜがきもちいいから

ことりがさえずっているから

まあいつか

それでもまえをむけば

えがおになれるから

まあいつか

おもいえがいたみらいは

まあいつか

かならずかなうでしょう

あなたならきっと

そういつか

幸せのうた

ハートのエース

「それで、何を盗まれたのですか!？」

警部は鼻息荒く聞いた

「ハートです」

少女は答えた

K 「犯人はどんな姿でしたか？」

S 「りんご五個分くらいの大きさでした」

K 「背は小さかったのですね。ち、ちいさすぎやしませんか？」

他に特徴は？」

S 「丸い黒目が印象的でした」

K 「日本人でしたか？」

S 「わかりません。肌は真っ白でした。リボンを頭につけていました」

K 「他にもどんなことでもいいから教えてください」

K 「現れたときアップルパイを食べていました」

S 「どのようにしてあなたはハートを盗まれたのですか？」

S 「ハローって言ったんです」

K 「それでその隙に盗まれたのですか？」

S 「はい、しっかりと盗まれました」

K 「そのとき他に人はいませんでしたか？」

S 「黄色いリボンをつけたそっくりな犯人が一緒にいました」

K 「それはかなり複雑な犯行ですね」

S 「わたしのハートは取り戻せるのでしょうか？」

K 「大丈夫。私が約束します」

そんな夢を幼いころに見た女の子も
今はしっかりりんご十七個分くらいの身長に

子供のころに
りんご三個分くらいの大きさの
帽子をかぶったおじいさんや天使たちがいた部屋で

描いた夢は今もまだ どこまでも広がってゆきます

幸せのうた

僕たちが見ているもの

僕たちが見ている あの空
空の色は 同じなのだろうか
僕たちが聴いている あのメロディ
音色は同じなのだろうか

僕たちが耐えるべき試練
辛さは同じなのだろうか
僕たちが使う言葉
その意味は同じなのだろうか

僕たちが住んでいる世界
本当にひとつなのだろうか
僕たちが愛するとき
愛の重さは同じなのだろうか

分かりきつてしまっている答え
それでもこの世は良いものと信じて
空を見上げて 歩いてゆきたい

幸せのうた

瑠璃色の地球で

瑠璃色の地球で夢を
ぼくらは見ようとあつまった
叶える路と　ときめきを
心に持ってあつまった

瑠璃色の地球で愛を
ぼくらはしようとあつまった
心から　心から　ただ
信じあうためにあつまった

瑠璃色の地球で歌を
ぼくらは歌おうとあつまった
色んな歌を詠おうと
涙をすくってあつまった
百億光年彼方から
ぼくはあなたに逢いにきた

幸せのうた

海

どうして海は青いのに
涙は青くないのかな
海ほど涙を流したら
涙は青くなるのかな

涙はいつも眠っている
そうして あの子が泣いたなら
涙は自分の本当の
願っていたこと思い出す

流れて海へ行きたいよ
この子の悲しみ連れてゆく
だけど涙は頬の上
指で拭かれて消えちやった
どうして海は青いのに
涙は青くないのかな

泣くだけ泣いて空を見て
くいしばっては雲を見る
あの子の頬にあつめた涙
想いは いつも海のように

幸せのうた

虹を泳いでる

川は流れる ぴちゃぴちゃと
おじちゃんと あの日一緒に空の下
鮎に針つけおじちゃんは ぼくに笑顔で竿くれた
ぼくはじっと待っていた

友釣りで 釣られる鮎はせつないな
それなのにぼくは わくわく待っていた
岩の下 とつぜん鮎はさらわれた
友だちとただ逢いたかっただけなのに

川は流れる すこやかに
大好きなおじちゃんおにぎりくれました
何疋も かごにしずかに鮎がいて
ぼくはつめたく水ふれた
友釣りで釣られる鮎はなすがまま
ぼくはその夜おいしく食べた

昨日まで泳いだ鮎は食べられた
友達とただ話したかっただけなのに

今日もまた川は流れる きよらかに
大好きなおじちゃん いまは天国で
あの鮎もきつと みんな空の上
たのしい歌を歌ってる
たのしく虹を泳いでる

幸せのうた

好きってことを才能に

好きってことを才能に
幸せいつばいつかみませう
好きってことをふやませう
スイングしながら弾みませう

好きってことを才能に
なにがあつてもケセラセラ
好きってことを才能に
あふれる想ひを伝えませう

好きってことを才能に
人との出逢いはセッションです
素敵なフレエズ奏でませう
ブルウス、ビバツプ、エトセトラ・・・
好きってことを才能に
くよくよしないで 顔上げて

好きってことを才能に
ワクワクすること始めませう

好きってことを才能に
自分を愛してあげませう

幸せのうた

花はひとりではない

花はひとりではないのです
何枚もの花びらが
寄り添い初めて花になる

花はひとりではないのです
何枚もの緑葉が
寄り添い初めて花になる

花はひとりではないのです
何本もの根っこが
寄り添い初めて花になる

花はひとりではないのです
振り向けば 私たちも

幸せのうた

虹はたしかにそこにいる

虹は今頃なにしている
空の向こうでなに想う

雨と一緒に待っている
太陽さんとお話ししている

虹は今頃 誓うだろう
「雨のあとには わたしが来ます
見事な七色待っててごらん
空にでっかい希望のアーチ」

ときめくあの日のようでしょう
せつなくうれしいときめきよ

虹は今頃どこにいる
左の胸に手をあてて

ドクンドクンとたしかめる

虹はいつでもそこにいる

虹はたしかに

そこにいる

幸せのうた

希望のうた

争いと希望が戦争をしたなら
争いは希望を殺そうとするだろう

希望はその瞬間にも
幸せになることだけを考えるだろう

争いは希望を妬み責めるだろう
その同じ時間 希望はロマンを胸に抱くだろう

もしかしたら争いは希望を
本当に殺してしまうかもしれない
それはとてもせつないことだ

それでも希望は幸せになろうとした自分を
心から愛するだろう
後悔はしないだろう

争いはそのあとでどんな世界をつくるだろう

希望はやがて生まれ変わり

争いはまた希望を愚かだと攻めるだろう

その同じとき

希望は大きなロマンに向かい

何度でもまた動き出すだろう

幸せのうた

踏みしめる

心配するのではなく
そばにいてあげたい

相談することを恐れず
軽はずみになることを恐れない

悩むよりも考えよう

言うは安し
まだ上手にはできないけれど

一生懸命考えたなら
きっと出口は見つかる

それが誰かとならなおさら

踏みしめる

今いる場所を

(喜びながら 信じながら)

踏みしめる

今までの道を

(懐かしみながら 恥ずかしながら)

踏みしめる

これから続く道を

(求めながら あこがれながら)

僕たちは

この道を味わいながら

踏みしめる

(愛しながら 愛されながら)

幸せのうた

しあわせくんがノックする

しあわせくんは笑顔が大好き

しあわせくんは人を想う気持ちが大好き

しあわせくんは助け合う気持ちが大好き

しあわせくんは許しあう気持ちが大好き

しあわせくんは認め合う気持ちが大好き

しあわせくんは受け入れる気持ちが大好き

しあわせくんは前を向く気持ちが大好き

しあわせくんはあきらめない気持ちが大好き

しあわせくんは愛し合う気持ちが大好き

しあわせくんはいたわり合い励まし合う言葉が大好き

しあわせくんはあなたの全てが大好き

今日しあわせくんが

あなたのドアをノックします

「ぼくがいつもそばにいるよ」と

幸せな明日を持って

しあわせくんが微笑みます

ほら あなたのすぐそばに

幸せのうた

あれ これ

あれもいい
これもいいって
ぐるぐるまわって
もとのぼしよ

あれはいや
これもいやって
ぐるぐるまわって
おなじぼしよ？

あれをして
これをして
ゆっくりいきましょ
つぎのぼしよ

あれからよ
これからよ

ありがたいねと
ふりかえり

「あれあれ」と
「これこれ」と
さとすこえする
ふりむけば
かみさますべて
おみとおし

あれもすき
これもすき
たのしく
いきましょ
つぎのばしょ

幸せのうた

猫に小判

猫に小判
大阪のおばはん

王将でチャーハン
出口で頭打って傷バン

生きながら涅槃
真夜中にアハン

四次元ポケットみたいなかばん
ひっくりかえして
こわれかけのそろばん
すぐくはやい計算

今朝は横断歩道の当番
少年は元気な黄色い短パン

そこへ

通り過ぎる猫に小判
ニャーとくわえて
しっぽのぼす子猫
ピンと張る背中

くるりと煙巻いて
「どーすんのこれ」と
思いながらも
いつかあなたに恩返し

幸せのうた

カモメ

久しぶりだな
この海
変わらない

人間たちがいる
二人
のどかだ

人間たち
近づくと驚くかな
さつきから
ずっとぼくを見てる

あのテトラポッドに降りよう
今日はこのあたり
灯台を目指す仲間が多いな
知らない奴らばかりだ

ああ青空が広い

こんないい天気は久しぶりだ

人間たちが食べてるパン
美味しそうだ
近づいたらくれるかな

そういや最近何も食べてないや
昆虫でも探すかな

相変わらずここはいい海だ
ここにずっといられたら
それはそれでいいのかもしれないけど
そうもいかないんだ
残る奴らもいるけど
ぼくは行くよ

さて 次の海岸まで
ちょいと遠いぞ

でも行きますか
南へ

羽根よ

幸せのうた

ひとふんばり
頑張ってくれよ
人間たち
楽しく過ごしなよ

世界は広く
シンプルだよ
空は想像よりも
遥かに高いよ
ぼくは今からもうちょっと南の海岸へバカンスに行くよ
また来年、この季節にここに来るから

では羽ばたきますか

白い鳥が視界から消えるまで
僕たちは見続けていた

「白い鳥を視界から消えるまで見届けると
幸せになれる」というジンクスを信じて

石釜で焼いたという

美味しいパンを食べながら

白い鳥の気持ちを想像しながら

幸せのうた

奇跡

どうして地球は回るのだろう？
誰かが誰かを想う気持ちが
地球を動かしてるのかなあ

どうしてお花は咲くのだろう？
誰かが誰かを想う気持ちが
咲かせているのかなあ

どうして風は吹くのだろう
誰かが誰かを想う気持ちが
吹かせているのかなあ

どうして地球は回るのだろう？
誰かが誰かを想う気持ちが
地球を動かしてるのかなあ

幸せのうた

声を聴かせて

私が私を離れ
私があなを離れ
欲望の炎に近づこうとするとき
どうかこの魂をここに留まらせて
守るべきもの
信じるべきものから
私が離れそうなときは
どうかその声を聴かせて
あなたの森のハンモックで
うたたねをしていたようなぬくもりを
いつまでも忘れないように
あの朝陽を 青空を 光の帯を
心にいつまでも輝かせて
私が正々堂々と空を見上げられるように
私が私を離れ
私があなを離れ
欲望の炎に近づこうとするとき
広大な海の水を与えてください
世界を渡ってきた

潮の香りで目が覚めるような
青い水を与えてください
守るべきもの
信じるべきものから
私が離れそうなときは
幼きころの風のささやきを頬に
与えてください
花を見て美しく感じ
空を見て清清しく心を洗うような
幼きころの風のささやきを
吹き抜けさせてください
この世界がまだ
美しきものであることを
すべての人たちが心に
感じられる日々でありますように
木々の中に 青空の上に 誰もの心の中に
光を放つあなたの声を
私たちが迷うときには
どうか聴かせてください
その声を私たちは気づきとして
きつと日々の中で
感じ取ることでしょう

幸せのうた

ありか

こころはどこにおありか？

うえのほう？

したのほう？

まんなか？

ひだりのほう？

うしろのほう？

こころはどこにおありか？

あたたかい？

ときめいてる？

うれしい？

せつない？

ふるえてる？

こころはどこにおありか？

あさのはじまりに

幸せのうた

ありがとうって
あふれてきたら

てをあてる
こころはいつも
そこにある

キレイ

一日で
一番

最高に
空気がキレイ

朝

歩く人たちの
想いも

最高にキレイ

朝

玄関を掃く人
ジョギングをする人
仕事へと急ぐ人
コンビニでパンを買う人
自転車の学生たち

幸せのうた

始まりのエネルギー
包み込む太陽のエネルギー

一日で
一番

最高に
空気がキレイ

朝
町を包むすべてが
最高にキレイ

五目焼きそば

とっても近所の中華屋さん
秋期間特別セールでランチ
自炊ができず外食気分
五目焼きそばいただきました

大きな海老ばかりの
プリプリ海老焼きそばも
それはそれは美味しいだろう

でも
キクラゲがあって
人参があって
白菜があって
うずらがあって
海老があるから

海老が二個だけでも
ほっぺが落ちそう

幸せのうた

白菜や人参だけの焼きそばは
ちょっとさみしいけれど
海老だけだと直球過ぎるけど
五目になればハーモニー

こんなところにも
宇宙の調和

良く見ると
しめじとイカも入っていました
五目じゃないし・・・
でも良い加減でハッピー

ちなみに素材だけだとやはり
美味しくはなく
大事なものは味付け

この味付けは
人生にたとえると
何なのでしょう？

あなたにとっては？

幸せのうた

未来

あなたは気づいてゆく
様々なことに
良いこともあれば
ときには
そうでないこともある

でもあなたは
すべてを力にして生きてゆく
真っ直ぐに伸びることを決めたなら
あなたは必ず祝福されている

あなたは気づいてゆく
でもときには本当のことだけを身にするために
敏感な自分をすこし
良い加減にしてあげるべきときもある

エネルギーの高まりに
あなたは感謝に包まれる 感謝があふれている
あふれだした感謝をまた誰かに返し

愛のキャッチボールを続ける

あなたの努力は見られている
頑張る人のことは誰もが
自然と応援したくなる
誰も理解者がいないと思うとき
周りすべてが理解者であることもある

あなたは見守られている
あなたは許されている
あなたの気づきは
あなたの成長が導き出した
人生の泉

幸せのうた

瞳のなかの仏さま

あの人の瞳のなかにも
あの人の瞳のなかにも
逞しく生きる仏さまがいる

あの空のすべてにも
街路樹にも 地面にも
生きとし生けるものすべてに
静かに見守る神様がいる

部屋にあるミリオンバンブーの
新芽が伸びてきました
この新芽にも仏さまがいる

あの人の声のなかにも
あの人の声のなかにも
逞しく生きる仏さまがいる

つながりながら
導きあいながら

あの人の瞳の中にも
あの人の瞳の中にも
遅く生きる仏さまがいる

幸せのうた

花

春に春の花が咲き
夏に夏の花が咲く

それぞれに美しく
夢見るように咲き誇る

秋に秋の花が咲き
冬に冬の花が咲く

雨が上がれば花開き
ここにいるよと美しい

人には人にそれぞれの
あたり背負って生きてゆく
花のように一心に
咲き誇りたいと願いつつ

あとがき

阿閉真琴

普段、私は作詞家として、歌謡曲の歌詞を書くという仕事を請け負っています。

思えば、若かりし頃は、言葉には光がありました。

世界は鮮やかでした。夢中になれる夢がありました。

残念ながら、現代においては、言葉というものはネガティブな磁場に侵されてしまっていると、私は思っています。

美しい言葉は、きっと幸せな未来を導きます。

この詩集にある詩はすべて、「朝」という時間に向けて紡ぎました。

毎日、日記のように紡いだ詩です。

朝の始まりに、世界は希望に包まれます。昨日がどうであれ、私たちの前には、新しい一日が常に待っています。未来が私たちを呼んでいます。

この詩集のタイトルは「毎日が幸せになる詩」

この詩集を手にとったあなたが、思わず笑顔になるような、そんな言葉を紡いであります。

あなたは、この詩集をお読みになって、どのように感じて

幸せのうた

いただけましたでしょうか？

詩とは、「世界をどのように見るのか」という視点を言葉にしたものです。

そこには感情があり、風景があり、ぬくもりがあります。

十人十色の宇宙の中で、あなたが生き抜く未来が、希望に溢れんばかりに咲き誇りますことを、心から願っています。

いつまでも、あなたの心の中に、「幸せの言葉」がありますように。

毎日が幸せになる詩

2015年10月 第三版発行

著者 阿閉真琴 発行元 A to Z Creation

atozi@nifty.com

阿閉真琴ホームページ <http://atozi.net>

阿閉真琴プロフィール

作詞家 日本音楽著作権協会正会員

代表曲 平井堅「楽園」 V6「ありがとうのうた」 (Asz-Project) と
して参加

嵐「ONLY LOVE」 「トビラ」 TRIPLANE「アイコトバ」

前川清「霖霖と」 石川さゆり「風ゆらら」

提供アーティスト

平井堅、嵐、V6、NEWS、KAT-TUN、タッキー&翼、Hey! Say!

JUMP、

SEXY ZONE、ジャニーズJr、Z-1、前川清、中村美律子、石川さゆり、宇都宮隆、

幸せのうた

新井裕子、石嶺聡子、島谷ひとみ、安良城紅、BENI、TRIPLANE、
藤木直人

中島由紀江、上原奈美、ESCOLTA、光永亮太、おれパラ、
CHILDFOOD、NAMI、他